

# 少女

## 渋谷栄一訳

### 第一章 朝顔姫君の物語 藤壺代償の恋の諦め

「第一段 故藤壺の一周忌明ける」

年が変わって、宮の御一周忌も過ぎたので、世の人々の喪服が平常に戻って、衣更のころなどもはなやかであるが、それ以上に賀茂祭のころは、おおよその空模様も気分がよいのに、前斎院は所在なげに物思いに耽つていらつしやるが、庭先の桂の木の下を吹く風、慕わしく感じられるにつけても、若い女房たちは思い出されることが多いところに、大殿から、

「御禊の日は、どのようにならぬとお通りしになりましたか」

と、お見舞い申し上げなされた。

「今日は、思いもかけませんでした 再びあなたが禊をなさることは」

紫色の紙、立て文にきちんとして、藤の花におつけになっていた。季節柄、感動をおぼえて、お返事がある。

「喪服を着たのはつい昨日のことと思っておりますのに もう今日はそれを脱ぐ禊をするとは、何と移り変わりの早い世の中ですか」 はかなくて、ただけあるのを、例によつて、お目を凝らして御覧になつていらつしやる。

喪服をお脱ぎになるころにも、宣言のもとに、置き所もないほど、お心づかいの品々が届けられたのを、院は見苦しいこととお思いになりお口になさるが、

「意味ありげな、色めかしいお手紙ならば、何とか申し上げてご辞退するのですが、長年、表向きの折々のお見舞いなどはお馴れ申し上げになつていて、とても真面目な内容なので、どのようになり紛らわしてお断り申した

らよいだらうか」

と、困っているようである。

「第二段 源氏、朝顔姫君を諦める」

女五の宮の御方にも、このように機会を逃さずお見舞い申し上げるので、とても感心して、

「この君が、昨日今日までは子供と思つていましたのに、このように成人されて、お見舞いくださるとは。容貌のとても美しいのに加えて、氣立てまでが人並み以上にすぐれていらつしやいます」

とお褒め申し上げるのを、若い女房たちは苦笑申し上げる。

こちらの方にもお目にかかりなさる時には、

「この大臣が、このように心をこめてお手紙を差し上げなさるようですが、どうしてか、今に始まつた軽いお気持ちではありません。亡くなられた宮も、その関係が違つてしまわれて、お世話申し上げることができなくなつたとお嘆きになつては、考へていたことを無理にお断りになつたことなどとおつしやつては、後悔していらつしやつたことがよくありました。

けれども、故大殿の姫君がいらつしやつた間は、三の宮がお気になさるのが気の毒さに、あれこれと言葉を添えることもなかつたのです。今では、そのれつきとした奥方であつた方まで、お亡くなりになつてしまつたので、ほんとに、どうしてご意向どおりになられたとしても悪くはあるまいと思われますにつけても、昔に戻つてこのように熱心におつしやつていただくのも、そうなるはずであつたのだらうと存じます」

などと、いかにも古風に申し上げなさるのを、氣にすまぬとお思いになつて、

「亡き父宮からも、そのように強情な者と思われてまいりましたが、今さらに、改めて結婚しようというの、ひどくおかしいことと存じます」

と申し上げなされて、氣恥ずかしくなるようなきつぱりとした様子なので、無理にもお勧め申し上げることもできない。

宮家に仕える人たちも、上下の女房たち、皆が心をお寄せ申していたので、縁談事を不安にばかりお思いになるが、かの当の「自身は、心のありつ

たけを傾けて、愛情をお見せ申して、相手のお気持ち揺らぐのをじつと待っていらつしやるが、そのように無理してまで、お心を傷つけようなどとは、お考えにならないのであらう。

## 第二章 夕霧の物語 光る源氏の子息教育の物語

### 「第一段 子息夕霧の元服と教育論」

大殿腹の若君のご元服のこと、ご準備をなさるが、二条院でとお考えになるが、大宮がとも見たがつていつらしゃったのもごもつともに気の毒なので、やはりそのままあちらの殿で式を挙げさせ申し上げなさる。

右大将をはじめとして、御伯父の殿方は、みな上達部で高貴なご信望厚い方々ばかりでいらつしやるので、主人方でも、我も我もとしかるべき事柄は、競い合つてそれぞれがお仕え申し上げなさる。だいたい世間でも大騒ぎをして、大変な準備のしようである。

四位につけようとお思いになり、世間の人々もきつとそうであらうと思つていたが、

「まだたいそう若いのに、自分の思いのままになる世だからといって、そのように急に位につけるのは、かえつて月並なことだ」とお止めになった。

浅葱の服で殿上の間にお戻りになるのを、大宮は、ご不満でとんでもないこととお思いになったのは、無理もなく、お気の毒なことであった。

「ご対面なさつて、このことをお話し申し上げなさると、今のうちには、このように無理をしてまで、まだ若年なので大人扱いする必要はございませんが、考えていることがございまして、大学の道に暫くの間勉強させようという希望がございますゆえ、もつ二、三年間を無駄に過ごしたと思つて、いずれ朝廷にもお仕え申せるようになりましたら、そのうちに、一人前になりましよう。」

自分は、宮中に成長致しまして、世の中の様子を存じませんで、昼夜、御帝の前に伺候致して、ほんのちょっとと学問を習いました。ただ、恐れ多くも

直接に教えていただきましたのさえ、どのようなことも広い知識を知らないうちは、詩文を勉強するにも、琴や笛の調べにしても、音色が十分でなく、及ばないところが多いものでございました。

つまらない親に、賢い子が勝るといふ話は、とても難しいことでございますので、まして、次々と子孫に伝わつていき、離れてゆく先は、とても不安に思えますので、決めましたことでございます。

高貴な家の子弟として、官位爵位が心にかない、世の中の栄華におごる癖がついてしましますと、学問などで苦労するようなことは、とても縁遠いことのように思うようです。遊び事や音楽ばかりを好んで、思いのままの官爵に昇つてしまつと、時勢に従う世の人が、内心ではばかにしながら追従し、機嫌をとりながら従つていゝうちは、自然とひとかどの人物らしく立派なようですが、時勢が移り、頼む人に先立たれて、運勢が衰えた末には、人に軽んじられればかにされて、取り柄とするところがないものでございます。

やはり、学問を基礎にしてこそ、政治家としての心の働きが世間に認められるところもしつかりしたものでございましょう。当分の間は、不安なようでございますが、将来の世の重鎮となるべき心構えを学んだならば、わたしが亡くなつた後も、安心できようと存じてです。ただ今のところは、ぱつとしなくても、このように育てていきましたら、貧乏な大学生だといつてばかりして笑う者もけつてありますまいと存じます。」

などと、わけをお話し申し上げになると、ほつと吐息をおつきになって、なるほど、そこまでお考えになつて当然でしたことを。この大将などもあまりに例に外れたご処置だと、不審がつておりましたようですが、この子供心にも、とても残念がつて、大將や、左衛門督の子どもなどを、自分よりは身分が下だと見くびつていたのさえ、皆それぞれ位が上がり上がりし、一人前になつたのに、浅葱をとつらいと思つていられるので、気の毒なのでございます。」

と申し上げなさると、ちよつとお笑いになつて、

「たいそう一人前になつて不平を申しているようですね。ほんとうにたわいないことよ。あの年頃ではね。」

と言つて、とてもかわいとお思いであった。

「学問などをして、もう少し物の道理がわかったならば、そんな恨みは自然となくなってしまうでしょう」

とお申し上げになる。

## 「第二段 大学寮入学の準備」

字をつける儀式は、東の院でなされる。東の対を準備なさった。上達部、殿上人、めつたにないことで見たいものだと思つて、我も我もと参集なさつた。博士たちもかえつて気後れしてしまいそつである。

「遠慮することなく、慣例のとおりに従つて、手加減せずに、厳格に行いなさい」

とお命じになると、無理に平静をよそおつて、他人の家から調達した衣装類が、身につかず、不恰好な姿などにもかまいなく、表情、声づかいが、もつともらしくしては、席について並んでいる作法をはじめとして、見たこともない様子である。

若い君達は、我慢しきれず笑つてしまつた。一方では、笑つたりなどしないような、年もいった落ち着いた人だけをと、選び出して、お酌などもおさせになるが、いつもと違つた席なので、右大将や、民部卿などが、一所懸命に杯をお持ちになっているのを、あきれるばかり文句を言い言い叱りつける。

「おおよそ、宴席の相伴役は、はなはだ不作法でござる。これほど著名な誰それを知らなくて、朝廷にはお仕えしている。はなはだばかである」

などと言うと、人々がみな堪えきれず笑つてしまつたので、再び、

「つるさい。お静かに。はなはだ不作法である。退席していただきましょう」などと、脅して言うのも、まことにおかしい。

見慣れていらつしやらない方々は、珍しく興味深いことと思ひ、この大学寮ご出身の上達部などは、得意顔に微笑みながら、このような道を「愛好されて、大学に入学させなかつたのが結構なことだと、ますますこのうえなく敬服申し上げていらつしやつた。

少し私語を言つても制止する。無礼な態度であると言つても叱る。騒がしく叱つている博士たちの顔が、夜に入つてからは、かえつて一段と明る

くなつた燈火の中で、滑稽じみて貧相で、不体裁な様子などが、何から何まで、なるほど実に普通でなく、変わった様子であつた。

大臣は、

「とてもだらしなく、頑固な者なので、やかましく叱られてまごつくだろう」とおつしやつて、御簾の内に隠れて御覧になつていたのであつた。

用意された席が足りなくて、帰ろうとする大学寮の学生たちがいるのをお聞きになつて、釣殿の方にお呼び止めになつて、特別に賜物をなさつた。

## 「第三段 饗宴と詩作の会」

式が終わつて退出する博士、文人たちをお召しになつて、また再び詩文をお作らせになる。上達部や、殿上人も、その方面に堪能な人ばかりは、みなお残らせになる。博士たちは、律詩、普通の人は、大臣をはじめとして、絶句をお作りになる。興味ある題の文字を選んで、文章博士が奉る。夏の短いころの夜なので、すっかり明けて披講される。左中弁が、講師をお勤めした。容貌もたいそうきれいで、声の調子も堂々として、莊嚴な感じに読み上げたところは、たいそう趣がある。世の信望が格別高い学者なのであつた。

このような高貴な家柄にお生まれになつて、この世の栄華をひたすら楽しまれてよいお身の上でありながら、窓の螢を友とし、枝の雪にお親しみになる学問への熱心さを、思いつく限りの故事をたとえに引いて、それぞれが作り集めた句がそれぞれに素晴らしく、唐土にも持つて行つて伝えた

いほどの世の名詩である」と、当時世間では褒めたたえるのであつた。

大臣のお作は言うまでもない。親らしい情愛のこもつた点までも素晴らしかつたので、涙を流して朗誦してもはやしたが、女の身では知らないことを口にするのは生意気だと言われそうなので、嫌なので書き止めなかつた。

## 「第四段 夕霧の勉学生活」

引き続いて、入学の礼ということをおさせになつて、そのまま、この院

の中にお部屋を設けて、本当に造詣の深い先生にお預け申されて、学問をおさせ申し上げなされた。

大宮のところにも、めったにお出かけにならない。昼夜かわいがりなことで、いつまでも子供のようにはばかりお扱い申していらつしやるので、あちらでは、勉強もおできになれまいと考えて、静かな場所にお閉じこめ申し上げなされたのであった。

「一月に三日ぐらいは参りなさい」

と、お許し申し上げなされたのであった。

じつとお籠もりになって、気持ちの晴れないまま、殿を、

「ひどい方でいらつしやるなあ。こんなに苦しまなくても、高い地位に上り、世間に重んじられる人もいるではないか」

とお恨み申し上げなされるが、いったい性格が、真面目で、浮ついたところがなくていらつしやるので、よく我慢して、

「何とかして必要な漢籍類を早く読み終えて、官途にもついて、出世しよう」と思って、わずか四、五か月のうちに、『史記』などという書物、読み了えておしまいになった。

「第五段 大学寮試験の予備試験」

今では寮試を受けさせようとなさつて、まずご自分の前で試験をさせなされる。

いつものとおり、大将、左大弁、式部大輔、左中弁などばかり招いて、先生の大内記を呼んで、『史記』の難しい巻々を、寮試を受けるのに、博士が反問しそうなところどころを取り出して、ひととお読み申し上げなされると、不明な箇所もなく、諸説にわたつて読み解かれるさまは、爪印もつかず、あきれるほどよくできるので、

「お生まれが違つていらつしやるのだ」

と、皆が皆、涙を流しなされる。大将は、誰にもまして、

「亡くなった大臣が生きていらつしやつたら」

と、口に出されて、お泣きになる。殿も、我慢がおできになれず、

「他人のことで、愚かで見苦しいと見聞きしておりましたが、子が大きくなつ

ていく一方で、親が代わつて愚かになっていくことは、たいした年齢ではありませんが、世の中とはこうしたものなのだなあ」

などとおつしやつて、涙をお拭いになるのを見る先生の気持ち、嬉しく面目をほどこしたと思つた。

大将が、杯をおさしになると、たいそう酔つぱらつて顔つきは、とても痩せ細つていいる。

大変な変わり者で、学問のわりには登用されず、顧みられなくて貧乏でいたのであつたが、お目に止まるところがあつて、このように特別に召し出したのであつた。

身に余るほどのご愛顧を頂戴して、この若君のおかげで、急に生まれ変わったようになつたと思うと、今にまして将来は、並ぶ者もない声望を得るのであろうよ。

「第六段 試験の当日」

大学寮に参上なされる日は、寮の門前に、上達部のお車が数知れないくらい集まつていた。おおよそ世間にこれを見ないで残つていいる人はあるまいと思われたが、この上なく大切に扱われて、勞られながら入つてこられる冠者の君のご様子、なるほど、このような生活には耐えられないくらい上品でかわいらしい感じである。

例によつて、賤しい者たちが集まつて来ている席の末に座るのをつらいとお思いになるのは、もっともなことである。

ここでも同様に、大声で叱る者がいて、目障りであるが、少しも気後れせずに最後までお読みになった。

昔が思い出される大学の盛んな時代なので、上中下の人は、我も我もこの道を志望し集まつてくるので、ますます、世の中に、学問があり有能な人が多くなつたのであつた。擬文章生などとかいう試験をはじめとして、すらすらと合格なされたので、ひたすら学問に心を入れて、先生も弟子も、いつそうお励みになる。

殿でも、作文の会を頻繁に催し、博士、文人たちも得意である。すべてのようなことにつけても、それぞれの道に努める人の才能が發揮される

時代なのだった。

### 第三章 光る源氏周辺の人々の物語 内大臣家の物語

「第一段 齋宮女御の立后と光る源氏の太政大臣就任」

そろそろ、立後の儀があつてよいころであるが、

「齋宮の女御こそは、母宮も、自分の変わりのお世話役とおっしゃっていましたが、」

と、大臣もご遺志にかこつけて主張なさる。皇族出身から引き続き后にお立ちになることを、世間の人は賛成申し上げない。

「弘徽殿の女御が、まず誰より先に入内なさつたのもどうだらうか」

などと、内々に、こちら側あちら側につく人々は、心配申し上げている。兵部卿宮と申し上げた方は、今では式部卿になつて、この御世となつてからはいつそうご信任厚い方でいらつしやる、その姫も、かねての望みがかなつて入内なさつていた。同様に、王の女御として伺候していらつしやるので、

「同じ皇族出身なら、御母方として親しくいらつしやる方をこそ、母後のいらつしやらない代わりのお世話役として相応しいだらう」

と理由をつけて、ふさわしかるべく、それぞれ競争なさつたが、やはり梅壺が立后なさつた。ご幸福が、うつて変わつてすぐれていらつしやることを、世間の人は驚き申し上げる。

大臣は、太政大臣にお上がりになつて、大將は、内大臣におなりになつた。天下の政治をお執りになるようにお譲り申し上げなさる。性格は、まっすぐで、威儀も正しくて、心づかいなどもしっかりしていらつしやる。学問をとり立てて熱心になさつたので、韻塞ぎにはお負けになつたが、政治では立派である。

いく人もの妻妾にお子たちが十余人、いずれも大きく成長していらつしやるが、次から次と立派になられて、負けず劣らず榮えているご一族である。女の子は、弘徽殿の女御ともう一人いらつしやるのであつた。皇族出身を

母親として、高貴なお血筋では劣らないのであるが、その母君は、按察大納言の北の方となつて、現在の夫との間に子どもの数が多くなつて、それらの子どもと一緒に継父に委ねるのは、まことに不都合なことだ」と思つて、お引き離させなさつて、大宮にお預け申していらつしやるのであつた。女御よりはつと軽くお思い申し上げていらつしやつたが、性格や、器量など、とてもかわいらしくいらつしやるのであつた。

「第二段 夕霧と雲居雁の幼恋」

冠者の君は、同じ所でご成長なさつたが、それぞれが十歳を過ぎてからは、住む部屋を別にして、

「親しい縁者ですが、男の子には気を許すものではありません」

と、父大臣が訓戒なさつて、離れて暮らすようになっていたが、子供心に慕わしく思うことなきにしもあらずなので、ちよつとした折々の花や紅葉につけても、また雑遊びのご機嫌とりにつけても、熱心にくつついてまわつて、真心をお見せ申されるので、深い情愛を交わし合ひなさつて、きつぱりと今でも恥ずかしがりなさらない。

お世話役たちも、

「何の、子どもごつしのことなので、長年親しくしていらつしやつたお間柄を、急に引き離して、どうしてきまり悪い思いをさせることができようか」と思つていると、女君は何の考えもなくいらつしやるが、男君は、あんなにも子どものように見えても、だいそれたどんな仲だつたのであろうか、離れ離れになつてからは、逢えないことを気が気でなく思つたのである。

まだ未熟ながら将来の思われるかわいらしい筆跡で、書き交わしなつた手紙が、不用意さから、自然と落としておるときもあるのを、姫君の女房たちは、うすうす知っている者もいたのだが、どうして、こんな関係である」と、どなたに申し上げられようか。知っていながら隠しているのであろう。

「第三段 内大臣、大宮邸に参上」

あちらとこちらの新任の大饗の宴が終わって、朝廷の御用もなく、のんびりとしていたころ、時雨がさあつと降って、荻の上風もしみじみと感じられる夕暮に、大宮のお部屋に、内大臣が参上なさって、姫君をそこへお呼びになって、お琴などを弾かせなさる。大宮は、何事も上手でいらっしやるので、それらをみなお教えになる。

「琵琶は、女性が弾くには見にくいようだが、いかにも達者な感じがするものです。今の世に、正しく弾き伝えている人は、めったにいなくなってしまいました。何々親王、何々の源氏とか」

などとお教えになって、

「女性の中では、太政大臣が山里に隠しておいていらっしやる人が、たいそう上手だと聞いております。音楽の名人の血筋ではありますが、子孫の代になつて、田舎生活を長年していた人が、どうしてそのように上手に弾けたのでしょうか。あの大臣が、この他上手な人だと思つておつしやつたことがあります。他の芸とは違つて、音楽の才能はやはり広くいろんな人と合奏をし、あれこれの楽器に調べを合わせてこそ、立派になるものですが、独りで学んで、上手になつたというのは珍しいことです」

などとおつしやつて、大宮にお促し申し上げになると、

「柱を押さえることが久しぶりになつてしまいました」

とおつしやつたが、美しくお弾きになる。

「ご幸運な上に、さらにやはり不思議なほど立派な方なのです。お年をとられた今までに、お持ちでなかつた女の子をお生み申されて、側に置いてみすばらしくするでなく、れつきとしたお方にお預けした考えは、申し分のない人だと聞いております」

などと、一方ではお話し申し上げなさる。

「第四段 弘徽殿女御の失意」

「女性はただ心がけによつて、世間から重んじられるものがございますね」

などと、他人の身の上についてお話し出されて、

「弘徽殿の女御を、悪くはなく、どんなことでも他人には負けまいと存じて

おりましたが、思いがけない人に負けてしまった運命に、この世は案に相違したものだと思つて存じました。せめてこの姫君だけは、何とか思うようにしたいものです。東宮の御元服は、もうすぐのことになつたと、ひそかに期待していたのですが、あのような幸福者から生まれたお后候補者が、また後から追いついてきました。入内なさつたら、まして対抗できる人はいないのではないのでしょうか」

とお嘆きになると、

「どうして、そのようなことがありましようか。この家にもそのような人がいないで終わつてしまふようなことはあるまいと、亡くなつた大臣が思つていらつしやつて、女御の御ことも、熱心に奔走なさつたのでした。生きていらつしやつたならば、このように筋道の通らぬこともなかつたでしょうに」

などと、あの一件では、太政大臣を恨めしくお思い申し上げていらつしやつた。姫君のご様子が、とても子どもっぽくかわいらしくて、箏のお琴をお弾きになつていらつしやるが、お髪の下り端、髪具合などが、上品で艶々としてしているのをじつと見ていらつしやると、恥ずかしく思つて、少し横をお向きになつた横顔、その恰好がかわいらしげで、取由の手つきが、非常にじょうずに作つた人形のような感じがするので、大宮もこの上なくかわいと思つていらつしやつた。調子合わせのための小曲などを軽くお弾きになつて、押しやりなさつた。

「第五段 夕霧、内大臣と対面」

内大臣は、和琴を引き寄せなさつて、律調のかえつて今風なのを、その方面の名人がうちとけてお弾きになつて居るのは、たいそう興趣がある。御前のお庭の木の葉がほろほろと落ちきつて、老女房たちが、あちらこちらの御几帳の後に、集まつて聞いていた。

「風の力がおよそ弱い」

と、朗誦なさつて、

「琴のせいではないが、不思議としみじみとした夕べですね。もつと、弾きましようよ」

とおっしゃって、秋風楽」に調子を整えて、唱歌なさる声、とても素晴らしいので、みなそれぞれに、内大臣をも見事であるとお思い申し上げになつていらつしやるのと、それをいつそう喜ばせようといふのであるうか、冠者の君が参上なさつた。

「こちらに」とおっしゃって、御几帳を隔ててお入れ申し上げになつた。「あまりお目にかかれませぬね。どうしてこう、このご学問に打ち込んでいらつしやるのでしょうか。学問が身分以上になるのもよくないことだと、大臣もご存知のはずですが、こつもお命じ申し上げなさるのには、考える子細もあるのだからと存じますが、こんなに籠もつてばかりいらつしやるのは、お気の毒でございます」と申し上げなつて、

「時々、別のことをなさい。笛の音色にも昔の聖賢の教えは、伝わっているものです」とおっしゃって、御笛を差し上げなさる。

たいそう若々しく美しい音色を吹いて、大変に興がわいたので、お琴はしばらく弾きやめて、大臣が、拍子をおおげさではなく軽くお打ちになつて、萩の花で摺つた」

などとお歌いになる。

「大殿も、このような管弦の遊びにご熱心で、忙しいご政務からはお逃げになるのです。なるほど、つまらない人生ですから、満足のゆくことをして、過ごしたいものでございますね」

などとおっしゃって、お杯をお勧めなさつていらっしゃるうちに、暗くなつたので、燈火をつけて、お湯漬や果物などを、どなたもお召し上がりになる。

姫君はあちらの部屋に引き取らせなさつた。つとめて二人の間を遠ざけなさつて、お琴の音だけでもお聞かせしないように」と、今ではすっかりお引き離し申していらつしやるのを、

「お気の毒なことが起こりそうなお仲だ」

と、お側近くお仕え申している大宮づきの年輩の女房たちは、ひそひそ話しているのであつた。

「第六段 内大臣、雲居雁の噂を立ち聞く」

内大臣はお帰りになつたふうにして、こつそりと女房を相手なさるうと座をお立ちになつたのだが、そつと身を細めてお帰りになる途中で、このようなひそひそ話をしているの、妙にお思いになつて、お耳をとめなさると、「ご自分の噂をしている。

「えらそうにしていらつしやるが、人の親ですよ。いずれ、ばかばかしく後悔することが起こるでしょう」

「子を知っているのは親だというのは、嘘のようですね」

などと、こそこそと噂し合つた。あきれたことだ。やはりそうであつたのか。思いよらないことではなかつたが、子供だと思つて油断しているうちに。世の中は何といやなものであるな」

と、この子細をつぶさに了解なさつたが、音も立てずにお出になつた。前駆の先を払う声が盛んに聞こえるので、

「殿は、今お帰りあそばしたのだわ」

「どこに隠れていらつしやつたのかしら」

「今でもこんな浮気をなさるとは」

と言ひ合つている。ひそひそ話をした女房たちは、

「とても香ばしい匂いがしてきたのは、冠者の君がいらつしやるのだとばかり思つていましたわ」

「まあ、いやだわ。陰口をお聞きになつたかしら。厄介なご気性だから」

と、皆困り合つていた。

殿は、道中お考えになることに、

「まうたく問題にならない悪いことではないが、ありふれた親戚どうしの結婚で、世間の人もきつとそう取り沙汰するに違いないことだ。大臣が、強引に女御を抑えなさつて居るのも癪なのに、ひよつとして、この姫君が相手に勝てることがあるうかも知れないと思つていたが、くやしいことだ」

とお思いになる。殿どうしのお仲は、普通のことでは昔も今もたいそう仲よくいらつしやりながら、このような方面では、競争申されたこともお思ひ出しになつて、おもしろくないので、寝覚めがちに夜をお明かしになる。

「大宮だつて、そのような様子は御存じであろうに、たいへんにかわいがつていらつしやるお孫たちなので、好きなようにさせていらつしやるのだから」

と、女房たちが言っていた様子を、いま美しいとお思いになると、お心が穏やかでなくなつて、少し男らしく事をはつきりさせたがるご気性にとつては、抑えがたい。

#### 第四章 内大臣家の物語 雲居雁の養育をめぐる物語

「第一段 内大臣、母大宮の養育を恨む」

二日ほどして、参上なさつた。頻繁に参上なさる時は、大宮もとても満足され、嬉しく思つておいであつた。尼削ぎの御髪に手入れをなさつて、きちんとした小桂などをお召し添えになつて、わが子ながら氣づまりなほど立派なお方なので、直接顔を合わせずにお会いなさる。

大臣は御機嫌が悪くて、

「こちらにお伺いするのも体裁悪く、女房たちがどのように見えていますかと、気がひけてしまいます。たいした者ではありませんが、世に生きています。うちは、常にお目にかかせていただき、ご心配をかけることのないようにと存じております。

不心得者のことで、お恨み申さずにはいられないようなことが起こつてまいりましたが、こんなにはお恨み申すまいと一方では存じながらも、やはり抑えがたく存じられました」

と、涙をお拭いなさるので、大宮は、お化粧なさつていた顔色も変わつて、お目を大きく見張られた。

「どうしたことで、こんな年寄を、お恨みなさるのでしょうか」

と申し上げなさるのも、今さらながらお気の毒であるが、

「ご信頼申していたお方に、幼い子どもをお預け申して、自分ではかえつて幼い時から何のお世話も致さずに、まずは身近にいた姫君の、宮仕えなどが思つようにいかないのを、心配しながら奔走しいしい、それでもこの姫君を一人前にしてくださるものと信頼しておりましたのに、意外なことがございましたので、とても残念です。

ほんとうに天下に並ぶ者のない優れた方の方ようですが、近しい者どうし

が結婚するのは、人の外聞も浅薄な感じが、たいした身分でもないものどうしの縁組でさえ考えますのに、あちらの方のためにも、たいそう不体裁なことです。他人で、豪勢な初めての関係の家で、派手に大切にされるこそ、よいものです。縁者どうしの、馴れ合いの結婚なので、大臣も不快にお思いになることがあるでしょう。

それはそれとしても、これこれしかじかですと、わたしにお知らせくださつて、特別なお扱いをして、少し世間でも関心を寄せるような趣向を取り入れたいものです。若い者どうしの思いのままに放つて置かれたのが、心外に思われるのです」

と申し上げなされると、夢にも御存知なかつたことなので、驚きあきれなさつて、

「なるほど、そうおっしゃるのもごもつともなことですが、ぜんぜんこの二人の気持ち存じませんでした。なるほど、とても残念なことは、こちらこそあなた以上に嘆きたいくらいです。子どもたちと一緒にわたしを非難なさるのは、恨めしいことです。

お世話致してから、特別にかわいく思ひまして、あなたがお氣づきにならないことも、立派にしてやろうと、内々に考えていたのでしたよ。まだ年端もゆかないうちに、親心の盲目から、急いで結婚させようとは考えもしないことです。

それにしても、誰がそのようなことを申したのでしょう。つまらぬ世間の噂を取り上げて、容赦なくおっしゃるのも、つまらないことで、根も葉もない噂で、姫君のお名に傷がつくのではないでしようか」

とおっしゃると、

「どうして、根も葉もないことでございませうか。仕えている女房たちも陰ではみな笑っているようですのに、とても悔しく、面白くなく存じられるのですよ」

とおっしゃつて、お立ちになつた。

事情を知っている女房どうしは、実におかわいそうに思う。先夜の陰口を叩いた女房たちは、それ以上に氣も動転して、どうしてあのような内緒話をしたのだらう」と、一同後悔し合つていた。

「第二段 内大臣、乳母らを非難する」

姫君は、何もご存知でなくいらつしやるのを、お覗きになると、とてもかわいらしいご様子なのを、しみじみと拝見なさる。

「若いと言つても、無分別でいらつしやつたのを知らないで、ほんとうにこつまで一人前にとつていた自分こそ、もつとあさはかであつたよ」

とおつしやつて、御乳母たちをお責めになるが、お返事の申しようもない。

「このよつなごとは、この上ない帝の大切な内親王も、いつの間にか過ちを起す例は、昔物語にもあるようですが、二人の気持ちを知つて仲立ちする人が、隙を窺つてするのでしよう」

「この二人は、朝夕ご一緒に長年過ごしていらつしやつたので、どうして、お小さい二人を、大宮様のお扱いをさし越えてお引き離し申すことができませんよと、安心して過ごして参りましたが、一昨年ごろからは、はつきり二人を隔てるお扱いに変わりましたよつなごので、若い人と言つても、人目をごまかして、どういふものにか、ませた真似をする人もいらつしやるよつですが、けつして色めいたところもなくいらつしやるよつなごので、ちつとも思いもかけませんでした」

と、お互いに嘆く。

「よし、暫くの間、このことは人に言つまい。隠しきれないことだが、よく注意して、せめて事実無根だともみ消しなさい。今からは自分の所に引き取ろつ。大宮のお扱いが恨めしい。お前たちは、いくらなんでも、こつなつて欲しいとは思わなかつただろつ」

とおつしやるので、困つたことではあるが、嬉しいことをおつしやると思つて、

「まあ、とんでもありません。按察大納言殿のお耳に入ることをも考えますと、立派な人ではあつても、臣下の人であつては、何を結構なことと考へて望んだり致しましょう」

と申し上げる。

姫君は、とても子供つばいご様子で、いろいろとお申し上げなさつても、何もお分かりでないので、お泣きになつて、

「どつしたら、傷ものにおなりにならずすみ道ができようか」  
と、こつそりと頼れる乳母たちとご相談なさつて、大宮だけをお恨み申し上げなさる。

「第三段 大宮、内大臣を恨む」

大宮は、とてもかわいいとお思ひになる二人の中でも、男君へのご愛情がまさつていらつしやるのであつるか、このよつなごの気持ちがあつたのも、かわいらしくお思ひになられるが、情愛なく、ひどいことのようにお考へになつておつしやつたのを、

「どつしてそんなに悪いことがあるうか。もともと深くおかわいがりになることもなくて、こんなにまで大事にしようともお考へにならなかつたのに、わたしがこのよつなごに世話してきたからこそ、春宮へのご入内のこともお考へになつたのに。思いどおりにゆかないで、臣下と結ばれるならば、この男君以外にまさつた人がいるだろつか。器量や、態度をはじめとして、同等の人がいるだろつか。この姫君以上の身分の姫君が相応しいと思つたのに、ご自分の愛情が男君の方に傾くせいからであろつか、内大臣を恨めしくお思ひ申し上げなさる。もしもお心の中をお見せ申したら、どんなにかお恨み申し上げになることであろつか。」

「第四段 大宮、夕霧に忠告」

このよつなごに騒がれていても知らないで、冠者の君が参上なさつた。先夜も人目が多くて、思つていることもお申し上げになることができずに終つてしまつたので、いつもよりもしみじみと思われなさつたので、夕方いらつしやつたのであろつ。

大宮は、いつもは何はさておき、微笑んでお待ち申し上げていらつしやるのに、まじめなお顔つきでお話など申し上げなさる時に、

「あなたのお事で、内大臣殿がお恨みになつていらつしやつたので、とてもお気の毒です。人に感心されないことにご執心なさつて、わたしに心配か

けさせることがつらいのです。こんなことはお耳に入れまいと思ひますが、そのようなこともご存知なくてはと思ひまして」

と申し上げなされると、心配していた方面のことなので、すぐに気がついた。顔が赤くなつて、

「どのようなことでしょうか。静かな所に籠もりまして以来、何かにつけて人と交際する機会もないので、お恨みになることはございますまいと存じておりますが」

と言つて、とても恥ずかしがっている様子を、かわいくも気の毒に思つて、

「よろしい。せめて今からは」注意なさい」  
とだけおっしゃつて、他の話にしておしまひになつた。

## 第五章 夕霧の物語 幼恋の物語

### 「第一段 夕霧と雲居雁の恋の煩悶」

「今後いつそうお手紙などを交わすことは難しいだろう」と考えると、とても嘆かわしく、食事を差し上げても、少しも召し上がらず、お寝みになつてしまつたふうになっているが、心も落ち着かず、人が寝静まつたころに、中障子を引いてみたが、いつもは特に錠など下ろしてないのに、固く錠さして、女房の声も聞こえない。実に心細く思われて、障子に寄りかかつていらつしやると、女君も目を覚まして、風の音が竹に待ち迎えられて、さらさらと音を立てると、雁が鳴きながら飛んで行く声が、かすかに聞こえるので、子供心にも、あれこれと思ひ乱れるのであろうか、

「雲居の雁もわたしのようなのかしら」

と、独り言をおっしゃる様子、若々しくかわいらしい。

とてももどかしくてならないので、

「」こを、お開け下さい。小侍従はおりますか」

とおっしゃるが、返事がない。乳母子だったのである。独り言をお聞きになつたのも恥ずかしくて、わけなく顔を衾の中にお入れなさつたが、恋心

は知らないでもないとは憎いことよ。乳母たちが近くに臥せつていて、起きていることに気づかれるのもつらいので、お互いに音を立てない。

「真夜中に友を呼びながら飛んでいく雁の声に、さらに悲しく吹き加わる萩の上を吹く風よ」

「身にしみて感じられることだ」と思ひ続けて、大宮の御前に帰つて嘆きがちでいらつしやるのも、お目覚めになつてお聞きにならうか」と憚られて、もじもじしながら臥せつた。

むやみに何となく恥ずかしい気がして、ご自分のお部屋に早く出て、お手紙をお書きになつたが、小侍従にも会うことがおできになれず、あの姫君の方にも行くことがおできになれず、たまらない思ひでいらつしやる。

女は女でまた、騒がれなかつたことばかり恥ずかしくて、自分の身はどうなるのだらう、世間の人はどのように思うだらう」とも深くお考えにならず、美しくかわいらしくて、ちよつと噂していることにも、嫌な話だとお突き放しになることもないのであつた。

また、このように騒がれねばならないこともお思ひでなかつたのを、御後見人たちがひどく注意するので、文通することもおできになれない。大人であつたら、しかるべき機会を作るであらうが、男君も、まだ少々頼りない年頃なので、ただたいそう残念だとばかり思つている。

### 「第二段 内大臣、弘徽殿女御を退出させる」

内大臣は、あれ以来参上なさらず、大宮をひどいとお思ひ申しいらつしやる。北の方には、このようなことがあつたとは、そぶりにもお見せ申されず、ただ何かにつけて、とても不機嫌なご様子で、

「中宮が格別に威儀を整えて参内なさつたのに対して、わが女御が将来を悲嘆していらつしやるのが、気の毒に胸が痛いので、里に退出おさせ申して、気楽に休ませて上げましよう。立后しなかつたとはいへ、主上のお側にずつと伺候なさつて、昼夜おいでのようですから、仕えている女房たちも気楽になれず、苦しがつてばかりいるようですから」

とおっしゃつて、急に里に退出させ申し上げなされる。お許しは難しかつたが、無理をおっしゃつて、主上はしぶしぶでおありであつたのを、むりや

りお迎えなされる。

「所在なくていらつしやるでしょうから、姫君を迎えて、一緒に遊びなどなさい。大宮にお預け申しているのは、安心なのですが、たいそう小賢しくませた人が一緒なので、自然と親しくなるのも、困った年頃になったので」とお申し上げなされて、急にお引き取りになされる。

大宮は、とても気落ちなされて、

「一人いらした女の子がお亡くなりになって以来、とても寂しく心細かったのが、うれしいことにこの姫君を得て、生きている間中お世話できる相手と思つて、朝な夕なに、老後の憂さつらさの慰めにしようと思つていましたが、心外にも心隔てを置いてお思ひになるのも、つらく思われます」

などとお申し上げなされると、恐縮して、

「心中に不満に存じられますことは、そのように存じられますと申し上げただけでございます。深く隔意もつてお思ひ申し上げることとはどうしていたしましょう。」

宮中に仕えております姫君が、ご寵愛が恨めしい様子で、最近退出おりますが、とても所在なく沈んでおりますので、気の毒に存じますので、一緒に遊びなどをして慰めようと存じまして、ほんの一時引き取るのでございます」と言つて、「お育てくださり、一人前にしてくださいましたのを、けつしていいかげんにはお思ひ申しておりません」

と申し上げなされると、このようにお思ひたちになつた以上は、引き止めようとなさつても、お考え直されるご性質ではないので、大変に残念にお思ひになつて、

「人の心とは嫌なものです。あれこれにつけ幼い子どもたちも、わたしに隠し事をして嫌なことですよ。また一方で、子どもとはそのようなものでしょうが、内大臣が、思慮分別がおりになりながら、わたしを恨んで、このように連れて行つておしまいになるとは。あちらでは、ここよりも安心なことはあるまいに」

と、泣きながらおつしやる。

「第三段 夕霧、大宮邸に参上」

ちよつど折しも冠者の君が参上なされた。「もしやちよつとした隙でもありやしないか」と、最近頻繁にお顔を出しになられるのであつた。内大臣のお車があるので、気がとがめて具合悪いので、こつそり隠れて、ご自分のお部屋にお入りになつた。

内大臣の若公達の、左近少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などと言つた人々も、皆ここには参集なされたが、御簾の内に入ることはお許しにならない。

左兵衛督、権中納言なども、異腹の兄弟であるが、故大殿のご待遇によつて、今でも参上して御用を承ることが親密なので、その子どもたちもそれぞれ参上なされるが、この冠者の君に似た美しい人はいないように見える。

大宮のご愛情も、この上なくお思ひであつたが、ただこの姫君を、身近にかわいひ者とお思ひになつてお世話なされて、いつもお側にお置きになつて、かわいがつていらつしやつたのに、このようにしてお引き移りになるのが、とても寂しいこととお思ひになる。

内大臣殿は、

「今の間に、内裏に参上しまして、夕方に迎えに参りましょう」と言つて、お出になつた。

「今さら言つても始まらないことだが、穩便に言いなして、二人の仲を許してやるうか」とお思ひになるが、やはりとても面白くないので、「ご身分がもう少し一人前になつたら、不満足な地位でないと見做して、その時に、愛情が深いか浅いかの状態も見極めて、許すにしても、改まつた結婚という形式を踏んで婿として迎えよう。厳しく言つても、一緒にいては、子どものことだから、見苦しいことをしよう。大宮も、まさかむやみにお諫めになることはあるまい」

とお思ひになると、弘徽殿女御が寂しがっているのかこつつけて、こちらにもあちらにも穏やかに話して、お連れになるのであつた。

「第四段 夕霧と雲居雁のわずかの逢瀬」

大宮のお手紙で、

「内大臣は、お恨みでしようが、あなたは、こつはなつてもわたしの気持ち

はわかつていただけでしよう。いらっしやってお顔をお見せください」

と差し上げなされると、とても美しく装束を整えていらっしやった。十四歳でいらっしやった。まだ十分に大人にはお見えでないが、とてもおつとりとしていらして、しとやかで、美しい姿態をしていらっしやった。

「いままでお側をお離し申さず、明け暮れの話相手とお思い申していたのに、とても寂しいことですね。残り少ない晩年に、あなたの「ご将来を見届けることができないことは、寿命と思いますが、今のうちから見捨ててお移りになる先が、どこかしらと思うと、とても不憫でなりません」

と言つてお泣きになる。姫君は、恥ずかしいこととお思いになると、顔もお上げにならず、ただ泣いてばかりいらっしやる。男君の御乳母の、宰相の君が出て来て、

「同じ主人様とお頼り申しておりますが、残念にもこのようにお移りあそばすとは。内大臣殿は別にお考えになるところがおありでも、そのようにお思いあそばしますな」

などと、ひそひそと申し上げると、いつそう恥ずかしくお思いになって、何ともおつしやらない。

「いえもう、厄介なことは申し上げなさいませ。人の運命はそれぞれで、とても先のことは分からないもので」

とおつしやる。

「いえいえ、一人前でないとお侮り申していらっしやるのでしよう。今はそうですが、わたくしどもの若君が人にお劣り申していらっしやるかどうか、どなたにでもお聞き合わせくださいませ」

と、癪にさわるのにまかせて言う。

冠者の君は、物陰に入つて御覧になると、人が見咎めるのも、何でもない時は苦しいだけであつたが、とても心細くて、涙を拭いながらいらっしやる様子を、御乳母が、とても気の毒に見て、大宮にいろいろとご相談申し上げて、夕暮の人の出入りに紛れて、対面させなされた。

お互いに何となく恥ずかしく胸がどきどきして、何も言わないでお泣きになる。

「内大臣のお気持ちがとてもつらいので、ままた、いつそ諦めようと思いますが、恋しくいらっしやてたままらなです。どうして、少しお逢いできそ

うな折々があつたころは、離れて過ごしていたのでしよう」

とおつしやる様子も、たいそう若々しく痛々しげなので、

「わたしも、あなたと同じ思いです」

とおつしやる。

「恋しいと思つてくださるでしょうか」

とおつしやる。と、ちよつとつなずきなざる様子も、幼い感じである。

「第五段 乳母、夕霧の六位を蔑む」

御殿油をお点けし、内大臣が宮中から退出なさつて来た様子で、ものものしく大声を上げて先払いする声に、女房たちが、

「それぞれ、お帰りだ」

などと慌てるので、とても恐ろしくお思いになつて震えていらっしやる。

そんなにやかましく言われるなら言われても構わないと、一途な心で、姫君をお放し申されない。姫君の乳母が参つてお捜し申して、その様子を見て、

「まあ、いやだわ。なるほど、大宮は御存知ないことではなかつたのだわ」

と思つと、実に恨めしくなつて、

「何とも、情けないことですね。内大臣殿がおつしやることは、申すまでもなく、大納言殿にもどのお聞きになることでしょう。結構な方であつても、初婚の相手が六位風情との御縁では」

と、つぶやいてるのがかすかに聞こえる。ちよつとこの屏風のすぐ背後に捜しに来て、嘆くのであつた。

男君は、「自分のことを位がないと軽蔑しているのだ」とお思いになると、こんな二人の仲がたまらなくなつて、愛情も少しさめる感じがして、許しがたい。

「あれをお聞きなさい。真っ赤な血の涙を流して恋い慕つているわたしを、浅緑の袖の色だと言つてけなしてよいものでしょうか、恥ずかしい」

とおつしやる。

「色々とわが身の不運が思い知らされますのは、どのような因縁の二人なのでしよう」

と、言い終わらないうちに、殿がお入りになつていらしたので、しかた

なくお戻りになった。

男君は、後に残された気持ちも、とても体裁が悪く、胸が一杯になって、ご自分のお部屋で横におなりになった。

お車は三輛ほどで、ひっそりと急いでお出になる様子を聞くのも、落ちて着かないので、大宮の御前から、「いらっしやい」とあるが、寝ている様子をして身動きもなさらない。

涙ばかりが止まらないので、嘆きながら夜を明かして、霜がたいそう白いころに急いでお帰りになる。泣き腫らした目許も、人に見られるのが恥ずかしいので、大宮もまた、お召しになって放さないだろうから、気楽な所どと思つて、急いでお帰りになったのであつた。

その道中は、誰のせいからでなく、心細く思い続けると、空の様子までもたいそう曇つて、まだ暗いのであつた。

「霜や氷が嫌に張り詰めた明け方の 空を真暗にして降る涙の雨だなあ」

## 第六章 夕霧の物語 五節舞姫への恋

「第一段 惟光の娘、五節舞姫となる」

大殿の所では、今年、五節の舞姫を差し上げなされる。何ほどといつたご用意ではないが、童女の装束など、日が近くなつたといつて、急いでおさせになる。

東の院では、参内の夜の付人の装束を準備させなされる。殿におかれては、全般的な事柄を、中宮からも、童女や、下仕えの人々のご料などを、並大抵でないものを差し上げなされた。

去年は、五節などは停止になつていたが、もの寂しかった思いを加えて、殿上人の気分も、例年よりもはなやかに思うにちがいない年なので、家々が競つて、たいそう立派に善美の限りを尽くして用意をなさるとの噂である。

按察大納言、左衛門督と、殿上人の五節としては、良清が、今では近江守で左中弁を兼官しているのが、差し上げるのだった。皆残させなされて、宮仕えするようにとの、仰せ言が特にあつた年なので、娘をそれぞれ差し

上げなされる。

大殿の舞姫は、惟光朝臣が、摂津守で左京大夫を兼官しているその娘の、器量などもたいそう美しいという評判があるのをお召しになる。つらいことと思つたが、

「按察大納言が、異腹の娘を差し上げられるというのに、朝臣が大切なまな娘を差し出すのは、何の恥ずかしいことがあるうか」

とお責めになるので、困つて、いつそのこと宮仕えをそのままさせようと考えていた。

舞の稽古などは、里邸で十分に仕上げ、介添役など、親しく身近に添うべき女房などは、丹念に選んで、その日の夕方大殿に参上させた。

大殿邸でも、それぞれのご婦人方の童女や、下仕えの優れている者とお比べになり、選り出される者たちの気分は、身分相応につけて、たいそう誇らしげである。

主上のお前に召されて御覧になられる前稽古に、殿のお前を通らせてみようとお決めになる。誰一人落第する者もないくらいに、それぞれ素晴らしい童女の姿態や、器量にお困りになつて、

「もう一人分の舞姫の介添役を、こちらから差し上げたいものだな」  
などと言つてお笑いになる。わずかに態度や心構えの違いによつて選ばれたのであつた。

「第二段 夕霧、五節舞姫を恋慕」

大学の君は、ただ胸が一杯で、食事なども見たくなく、ひどくふさぎこんで、漢籍も読まないで物思いに沈んで横になつていらつしやつたが、気分も紛れようかと外出して、人目に立たないようにお歩きになる。

姿態、器量は立派で美しく、落ち着いて優美でいらつしやるので、若い女房などは、とても素晴らしいと拝見している。

対の上の御方には、御簾のお前近くに出ることさえお近寄らせにならない。ご自分のお心の性癖から、どのようにお考えになつたのであろうか、他人行儀なお扱いなので、女房なども疎遠なのだが、今日は舞姫の混雑に紛れて、入り込んで来られたのであろう。

舞姫を大切に下ろして、妻戸の間に屏風などを立てて、臨時の設備なので、そつと近寄つてお覗きになると、苦しうに物に寄り臥していた。

ちようど、あの姫君と同じくらいに見えて、もう少し背丈がすらつとしていて、姿つきなどが一段と風情があつて、美しい点では勝つてさえ見える。暗いので、詳しくは見えないが、全体の感じがたいそうよく似ている様子なので、心が移るといふのではないが、気持ちを抑えかねて、裾を引いてさらさらと音を立てさせなされると、何か分らず、変だと思つていると、「天にいらつしやる豊岡姫に仕える宮人も わたしのもと思つて気持ちを忘れないでください 瑞垣のずつと昔から思い染めてきましたのですから」とおつしやるのは、あまりにも唐突というものである。

若々しく美しい声であるが、誰とも分らず、薄気味悪く思つていたところへ、化粧し直そうとして、騒いでいる女房たちが、近くにやつて来て騒がしくなつたので、とても残念な気がして、お立ち去りになつた。

### 「第三段 宮中における五節の儀」

浅葱の服が嫌なので、宮中に参内することせず、億劫がつていらつしやるのを、五節だからというので、直衣なども特別の衣服の色を許されて参内なさる。いかにも幼げで美しい方であるが、お年のわりに大人っぽくて、しゃれてお歩きになる。帝をはじめ参らせて、大切になさる様子は並大抵でなく、世にも珍しいくらいのご寵愛である。

五節の参内する儀式は、いずれ劣らず、それぞれがこの上なく立派になさつてゐるが、舞姫の器量は、大殿と大納言のとは素晴らしい」という大評判である。なるほど、とてもきれいであるが、おつとりとして可憐なさまは、やはり大殿のには、かないそうもなかつた。

どこことなくきれいな感じの当世風で、誰の娘だか分からないよう飾り立てた姿態などが、めつたにないくらい美しいのを、このように褒められるようである。例年の舞姫よりは、皆少しずつ大人びていて、なるほど特別な年である。

大殿が宮中に参内なさつて御覧になると、昔お目をとどめなかつた少女の姿をお思い出しになる。辰の日の暮方に手紙をやる。その内容はご想像

ください。

「少女だつたあなたも神さびたことでしょう 天の羽衣を着て舞つた昔の友も長い年月を経たので」

歳月の流れを数えて、ふとお思い出しになられたままの感慨を、堪えることができずに差し上げたのが、胸をときめかせるのも、はかないことであるよ。

「五節のことを言いますと、昔のことが今日のことのように思われます 日蔭のかずらを懸けて舞い、お情けを頂戴したことが」  
青摺りの紙をよく間に合わせて、誰の筆跡だか分からないように書いた、濃く、また薄く、草体を多く交えているのも、あの身分にしてはおもしろいと御覧になる。

冠者の君も、少女に目が止まるにつけても、ひそかに思いをかけてあちこちなさるが、側近くにさえ寄せず、たいそう無愛想な態度をしているので、もの恥ずかしい年頃の身では、心に嘆くばかりであつた。器量はそれは、とても心に焼きついて、つれない人に逢えない慰めにでも、手に入れないものだと思つた。

### 「第四段 夕霧、舞姫の弟に恋文を託す」

そのまま皆宮中に残させなかつて、宮仕えするようにとの御内意があつたが、この場合は退出させて、近江守の娘は辛崎の袂い、津守のは難波で袂いと、競つて退出した。大納言も改めて出仕させたい旨を奏上させる。左衛門督は、資格のない者を差し上げて、お咎めがあつたが、それも残させなされる。

津守は、「典侍が空いているので」と申し上げさせたので、そのように労をねぎらつてやろうか」と大殿もお考えになつていたので、あの冠者の君はお聞きになつて、とても残念だと思つた。

「自分の年齢や、位などが、このように問題でないならば、願ひ出てみたいのだが。思つてゐるといふことさえ知られないで終わつてしまふことよ」と、特別強く執心しているのではないが、あの姫君のことに加えて涙がこぼれる時々がある。

兄弟で童殿上する者が、つねにこの君に参上してお仕えしているのを、いつもよりも親しく相談なさつて、

「五節はいつ宮中に参内なさるのか」

とお尋ねになる。

「今年と聞いております」

と申し上げる。

「顔がたいそうよかつたので、無性に恋しい気がする。おまえがいつも見ているのが羨ましいが、もう一度見せてくれないか」

とおっしゃると、

「どうしてそのようなことができまじょうか。思うように会えないのでございます。男兄弟だといって、近くに寄せませんので、まして、あなた様にはどうしてお会わせ申すことができまじょうか」

と申し上げる。

「それでは、せめて手紙だけでも」

「とおっしゃるようになった。以前からこのようなことはするなと親が言われていたものを」と困つたが、無理やりにお与えになるので、気の毒に思つて持つて行つた。

年齢よりは、ませていたのであろうか、興味をもつて見るのであつた。緑色の薄様に、好感の持てる色を重ねて、筆跡はまだとても子供っぽい、将来性が窺えて、たいそう立派に、

「日の光にはつきりとおわかりになつたでしょう。あなたが天の羽衣も翻して舞う姿に思いをかけたわたしのことを」

二人で見ているところに、父殿がひよいとやつて来た。恐くなってどうしていいか分からず、隠すこともできない。

「何の手紙だ」

「と取つて取つたので、顔を赤らめていた。」

「けしからぬことをした」

と叱ると、男の子が逃げて行くのを、呼び寄せて、

「誰からだ」

と尋ねると、

「大殿の冠者の君が、これこれしかじかとおっしゃつてお与えになつたのです」

と言つと、すっかり笑顔になつて、

「何ともかわいらしい若君のおたわむれだ。おまえたちは、同じ年齢だが、お話にならないくらい頼りないことよ」

などと褒めて、母君にも見せる。

「大殿の公達が、すこしでも一人前にお考えになつてくださるならば、宮仕えよりは、差し上げようものを。大殿のご配慮を見ると、一度見初めた女性を、お忘れにならないのがたいそう頼もしい。明石の入道の例になるだろうか」

などと言つが、皆は準備にとりかかつていた。

「第五段 花散里、夕霧の母代となる」

あの若君は、手紙をやることさえおできになれず、一段と恋い焦がれる方が心がかかつて、月日がたつにつれて、無性に恋しい面影に再び会えないのではないかとばかり思つている。大宮のお側へも、何となく氣乗りがせず参上なさらない。いらつしゃつたお部屋や長年一所に遊んだ所ばかりが、ますます思い出されるので、里邸までが疎ましくお思いになられて、籠もつていらつしゃつた。

大殿は、東院の西の対の御方に、お預け申し上げていらつしゃつたのであつた。

「大宮のご寿命も大したことがないので、お亡くなりになつた後も、このように子供の時から親しんで、お世話してください」

と申し上げなされると、ただおっしゃるとおりになさるご性質なので、親しくかわいがつて上げなされる。

ちやつとなどお顔を拝見しても、

「器量はさほどすぐれていないな。このような方をも、父はお捨てにならなかつたのだ」などと、自分は、無性に、つらい人のご器量を心にかけて恋しいと思つのもつまらないことだ。氣立てがこのように柔和な方をこそ愛し合いたいものだ」

と思つ。また一方で、

「向かい合つていて見ていられないようなのも氣の毒な感じだ。こうして長

年連れ添っていらつしやつたが、父上が、そのような器量を、承知なさつたうえで、浜木綿ほどの隔てを置き置きして、何やかやとなさつて見ないようにしていらつしやるらしいのも、もつともなことだ」

と考える心の中は、大したほどである。

大宮の器量は格別でいらつしやるが、まだたいそう美しくいらつしやり、こちらでもあちらでも、女性器量のよいものとはばかり目馴れていらつしやるが、もともとはさほどでなかつた器量が、少し盛りが過ぎた感じがして、痩せてみ髪が少なくなっているのだが、このように難をつけたくなるのであつた。

「第六段 歳末、夕霧の衣装を準備」

年の暮には、正月のご装束などを、大宮はただこの冠君の君の一人だけの事を、余念なく準備なさる。いく組も、たいそう立派に仕立てなさつたのを見るのも、億劫にばかり思われるので、

「元旦などには、特に参内すまいと存じておりますのに、どうしてこのように準備なさるのでしょうか」

と申し上げなると、

「どうして、そのようなことがあつてよいのでしょうか。年をとつてすっかり気落ちした人のようなことをおつしやいますね」

とおつしやるので、

「年はとつていませんが、何もしたくない気がしますよ」

と独り言をいって、涙ぐんでいらつしやる。

「あの姫君のことを思っているのだろう」と、とても気の毒になって、大宮も泣き顔になつてしまわれた。

「男は、取るに足りない身分の人でさえ、気位を高く持つものです。あまり沈んで、こうしてはなりません。どうして、こんなによくよくよ思い詰めることがありますしょうか。縁起でもありません」

とおつしやるが、

「そんなことはありません。六位などと人が軽蔑するようなので、少しの間だとは存じておりますが、参内するのも億劫なのです。故祖父大臣が生き

ていらつしやつたならば、冗談にも、人からは軽蔑されることはなかつたでございましょうに。何の遠慮もいらぬ実の親でいらつしやいますが、たいそう他人行儀に遠ざけるようになさいますので、いらつしやる所にも、気安くお目通りもかきません。東の院にお出での時だけ、お側近く上がりませう。対の御方だけは、やさしくしてくださいませうが、母親が生きていらつしやいましたら、何も思い悩まなくてよかつたものを」

と言つて、涙が落ちるのを隠していらつしやる様子、たいそう気の毒なので、大宮は、ますますほろほろとお泣きになつて、

「母親に先立たれた人は、身分の高いにつけ低いにつけて、そのように気の毒なことなのですが、自然とそれぞれの前世からの宿縁で、成人してしまえば、誰も軽蔑する者はいなくなるものですから、思い詰めないでいらつしやい。亡くなつた太政大臣がせめてもう少しだけ長生きをしてくれればよかつたのに。絶大な庇護者としては、同じようにご信頼申し上げてはいますが、思いどおりに行かないことが多いですね。内大臣の性質も、普通の人とは違つて立派だと世間の人も褒めて言うようですが、昔と違つた事ばかりが多くなつて行くので、長生きも恨めしい上に、生い先の長いあなたにまで、このようなちよつとしたことにせよ、身の上を悲観していらつしやるので、とてもいろいろと恨めしいこの世です」

と言つて、泣いていらつしやる。

第七章 光る源氏の物語 六条院造営

「第一段 二月二十日過ぎ、朱雀院へ行幸」

元旦にも、大殿は御参賀なさらないので、のんびりとしていらつしやる。良房の大臣と申し上げた方の、昔の例に倣つて、白馬を牽き、節会の日は、宮中の儀式を模して、昔の例よりもいろいろな事を加えて、盛大なご様子である。

二月の二十日余りに、朱雀院に行幸がある。花盛りはまだのところであるが、三月は故藤壺の宮の御忌月である。早く咲いた桜の花の色もたいそう

美しいので、院におかれてもお心配りし特にお手入れあそばして、行幸に供奉なさる上達部や親王たちをはじめとして、十分に「ご用意なさつていた。

「お供の人々は皆、青色の袍に、桜襲をお召しになる。帝は、赤色の御衣をお召しあそばされた。お召しがあつて、太政大臣が参上なさる。同じ赤色を着ていらつしやるので、ますますそっくりで輝くばかりにお美しく見えるほどとお見えになる。人々の装束や、振る舞いも、いつもと違つて

「巧みにその場をおとりなしなさつた、心づかいは特に立派である。杯をお取りあそばして、

「鶯が昔を慕つて木から木へと飛び移つて囀つていますのは、今の木の花色が悪くなつていからでしょうか」

と仰せになる御様子、この上なく奥ゆかしくいらつしやる。このお杯事は、お身内だけのことなので、多数の方には杯が回らなかつたのであろうか、または書き洩らしたのであろうか。

院も、たいそうおきれいにお年とともに御立派になられて、御様子や態度が、以前にもまして優雅におなりあそばしていた。

今日は、専門の文人もお呼びにならず、ただ漢詩を作る才能の高いという評判のある学生十人をお呼びになる。式部省の試験の題になぞらえて、勅題を賜る。大殿のご長男の試験をお受けなさるようである。臆しがちな者たちは、ぼおつとしてしまつて、繋いでない舟に乗つて、池に一人一人漕ぎ出して、実に途方に暮れているようである。

「日がだんだんと傾いてきて、音楽の舟が幾隻も漕ぎ廻つて、調子を整える時に、山風の響きがおもしろく吹き合わせているので、冠者の君は、

「こんなにづらい修業をしなくても皆と一緒に音楽を楽しめたりできるはずのものを」

「第二段 弘徽殿太后を見舞つ」

夜は更けてしまつたが、このような機会に、太后宮のいらつしやる方を、避けてお伺い申し上げなさらないのも、思いやりのないもので、帰りにお立ち寄りになる。大臣も一緒に伺候なさる。

と、世の中を恨めしく思つていらつしやつた。

「春鶯囀」を舞うときに、昔の花の宴の時をお思い出しになつて、院の帝が、

太后宮はお待ち喜びになつて、ご面会なさる。とてもたいそうお年を召されたご様子にも、故宮をお思い出し申されて、こんなに長生きされる方もいらつしやるものを」と、残念にお思いになる。

もう一度、あれの程が見られるだろうか」

と仰せられるにつけても、その当時のことがしみじみと次々とお思い出されなさる。舞い終わるころに、太政大臣が、院にお杯を差し上げなさる。

「鶯の囀る声は昔のままですが、馴れ親しんだあの頃とはすっかり時勢が変わつてしまいました」

「今ではこのように年を取つて、すべての事柄を忘れてしまつておりましたが、まことに畏れ多くもお越し戴きましたので、改めて昔の御代のことか思い出されます」と、お泣きになる。

院の上は、

「宮中から遠く離れた仙洞御所にも、春が来たとき鶯の声が聞こえてきます」

帥宮と申し上げた方は、今では兵部卿となつて、今上帝にお杯を差し上げなさる。

「昔の音色そのままの笛の音に、さらに鶯の囀る声までもちつとも変わつて

「また改めてお伺い致しますよう」

と、申し上げなさる。

ゆつくりなさらずにお帰りあそばすご威勢につけても、大后は、やはりお胸が静まらず、

「どのように思い出していられるのだろう。結局、政権をお執りになるといつご運勢は、押しつぶせなかつたのだ」

と昔を後悔なさる。

尚侍の君も、ゆつたりした気分でお思い出しになると、しみじと感慨無量な事が多かった。今でも適当な機会に、何かの伝で密かに便りを差し上げなさることがあるのであろう。

大后は朝廷に奏上なさることのある時々、御下賜された年官や年爵、何かにつけながら、「意向に添わない時には、長生きをしてこんな酷い目に遭うとは」と、もう一度昔の御代に取り戻したく、いろいろとご機嫌悪がつているのであつた。

年を取つていかれるにつれて、意地の悪さも加わつて、院ももてあまして、例えようもなくお思い申し上げていらつしやるのだった。

さて、大学の君は、その日の漢詩を見事にお作りになつて、進士におなりになつた。長い年月修業した優れた者たちをお選びになつたが、及第した人は、わずかに三人だけであつた。

秋の司召に、五位に叙されて、侍従におなりになつた。あの人のことを、忘れる時はないが、内大臣が熱心に監視申していらつしやるのも恨めしいので、無理をしてまでもお目にかかることはなさらない。ただお手紙だけを適当な機会に差し上げて、お互いに気の毒なお仲である。

「第三段 源氏、六条院造営を企図す」

大殿は、静かなお住まいを、同じことなら広く立派にして、あちこちに別居して気がかりな山里人などを、集め住まわせようとお考えで、六条京極の辺りに、中宮の御旧居の近辺を、四町をいっばいにお造りになる。

式部卿宮が、明年五十歳におなりになる御賀のことを、対の上がお考えなので、大臣も、なるほど、見過ごすわけにはいかない」とお思いになつて、そのようにご準備も、同じことなら新しい邸で」と、用意させなさる。年が改まつてからは、昨年以上にこのご準備の事、御精進落としの事、楽

人、舞人の選定などを、熱心に準備させなさる。経、仏像、法事の日の装束、祿などを、対の上はご準備なさるのだった。

東の院で、分担してご準備なさることがある。ご間柄は、いままで以上にとても優美にお手紙のやりとりをなさつて、お過ごしになっているのであつた。

世間中大騒ぎしているご準備なので、式部卿宮のお耳にも入つて、長年の間、世間に対しては広大なお心であるが、わたくしどもには理不尽にも冷たくて、何かにつけて辱め、宮人に対してもお心配りがなく、嫌なことばかり多かつたのだが、恨めしいと思うことがあつたのだろう」

と、お気の毒にもまたつらくもお思いであつたが、このように数多くの女性関係の中で、特別のご寵愛があつて、まことに奥ゆかしく結構な方として、大切にされていらつしやるご運命を、自分の家までは及んで来ないが、名譽にお思いになると、また、

「このように世間の評判となるまで、大騒ぎしてご準備なさるのは、思いがけない晩年の慶事だ」

と、お喜びになるのを、北の方は、「おもしろくなく、不愉快だ」とばかりお思いであつた。王女御の、ご入内の折などにも、大臣のご配慮がなかつたようなのを、ますます恨めしいと思ひ込んでいらつしやるのであろう。

「第四段 秋八月に六条院完成」

八月に、六条院が完成してお引越しなさる。未申の町は中宮の御旧邸なので、そのままお住まいになる予定である。辰巳は、殿のいらつしやる予定の区画である。丑寅は、東の院にいらつしやる対の御方、戌亥の区画は、明石の御方とお考えになつて造営なさつた。もともとあつた池や山を、不都合な所にあるものは造り変えて、水的情緒や、山の風情を改めて、いろいろと、それぞれの御方々のご希望どおりにお造りになつた。

東南の町は、山を高く築き、春の花の木を、無数に植えて、池の様子も趣深く優れていて、お庭先の前栽には、五葉の松、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などといった、春の楽しみをことさらには植えないで、秋の前栽を、ひとむらずつ混ぜてあつた。

中宮の御町は、もとからある山に、紅葉の色の濃い植木を幾本も植えて、泉の水を清らかに遠くまで流して、遣水の音がきわだつように岩を立て加え、滝を落として、秋の野を広々と作つてあるが、折柄ちよつどその季節で、盛んに咲き乱れていた。嵯峨の大堰あたりの野山も、見るかげもなく圧倒された今年の秋である。

北東の町は、涼しそうな泉があつて、夏の木蔭を主としていた。庭先の前栽には、呉竹があり、下風が涼しく吹くようにし、木高い森のような木は奥深く趣があつて、山里めいて、卯花の垣根を特別に造りめぐらして、昔を思い出させる花橋、撫子、薔薇、くたになどといった花や、草々を植えて、春秋の木や草を、その中に混ぜていた。東面は、割いて馬場殿を造つて、埒を結つて、五月の御遊の場所として、水のほとりに菖蒲を植え茂らせて、その向かい側に御厩舎を造つて、またとない素晴らしい馬を何頭も繋がせていらつしやつた。

西北の町は、北面は築地で区切つて、御倉町である。隔ての垣として松の木をたくさん植えて、雪を鑑賞するのに都合よくしてある。冬の初めの朝、霜が結ぶように菊の籬、得意げに紅葉する柞の原、ほとんど名も知らない深山木などの、木深く茂つているのを移植してあつた。

「第五段 秋の彼岸の頃に引つ越し始まる」

彼岸のころにお引つ越しになる。一度にとお決めあそばしたが、仰々しいようだと引つて、中宮は少しお延ばしになる。いつものようにおとなしく気取らない花散里は、その夜、一緒にお引つ越しなさる。

春のお庭は、今の秋の季節には合わないが、とても見事である。お車十五台、御前駆は四位五位の人々が多く、六位の殿上人などは、特別な人だけをお選びあそばしていた。仰々しくはなく、世間の非難があつてはと簡略になさつていたので、どのような点につけても大仰に威勢を張ることはない。

もうお一方のご様子も、大して劣らないようになさつて、侍従の君が付き添つて、そちらはお世話なさつているので、なるほどこういふこともあつたのであつたと見受けられた。

女房たちの曹司町も、それぞれに細かく当てあつたのが、他の何より

も素晴らしく思われるのであつた。

五、六日過ぎて、中宮が御退出あそばす。その御様子はそれは、簡略とはいつても、まことに大層なものである。御幸運の素晴らしいことは申すまでもなく、お人柄が奥ゆかしく重々しくいらつしやるので、世間から重んじられていらつしやることは、格別でおいであそばした。

この町々の間の仕切りには、堀や廊などを、あちらとこちらとが行き来できるように作つて、お互いに親しく風雅な間柄にお造りになつてあつた。

「第六段 九月、中宮と紫の上和歌を贈答」

九月になると、紅葉があちこちに色づいて、中宮のお庭先は何ともいえないほど素晴らしい。風がさつと吹いた夕暮に、御箱の蓋に、色とりどりの花や紅葉をとり混ぜて、こちらに差し上げになさつた。

大柄な童女が、濃い紫の袖に、紫苑の織物を重ねて、赤朽葉の羅の汗衫、とてももの馴れた感じで、廊や、渡殿の反橋を渡つて参上する。格式高い礼儀作法であるが、童女の容姿の美しいのを捨てがたくてお選びになつたのであつた。そのようなお所に伺候し馴れていたため、立居振舞、姿つき、他家の童女とは違つて、好感がもつて風情がある。お手紙には、

「お好みで春をお待ちのお庭では、せめてわたしの方の紅葉を風のたよりにも御覧あそばせ」

若い女房たちが、お使いを歓待する様子は風雅である。

お返事には、この御箱の蓋に苔を敷き、巖などの感じを出して、五葉の松の枝に、

「風に散つてしまふ紅葉は心軽いものです、春の変わらない色を この岩にどしりと根をはつた松の常磐の緑を御覧になつてほしいものです」

この岩根の松も、よく見ると、素晴らしい造り物なのであつた。このようにとつさに思いつきなさつた趣向のよさを、感心して御覧あそばす。御前に伺候している女房たちも褒め合つていた。大臣は、

「この紅葉のお手紙は、何とも憎らしいですね。春の花盛りには、このお返事は差し上げなさい。この季節に紅葉を販すのは、龍田姫がどう思つかいふこともあるので、ここは一步退いて、花を楯にとつて、強いことも言つ

たらよいでしょう」

と申し上げなされるのも、とても若々しくどこまでも素晴らしいお姿で魅力にあふれていらつしやる上に、いっそう理想的なお邸で、お手紙のやりとりをなさる。

大堰の御方は、このように御方々のお引つ越しが終わってから、人数にも入らない者は、いつか分らないようにこつそりと移ろつ」とお考えになつて、神無月にお引つ越しになるのであつた。お部屋の飾りや、お引つ越しの次第は他の方々に劣らないようにして、お移し申し上げなされる。姫君のご将来をお考えになると、万事についての作法も、ひどく差をつけず、たいそう重々しくお扱いなされた。